

実践研究校の取組

浦和東高校	・	・	・	・	・	・	5
志木高校	・	・	・	・	・	・	9
皆野高校	・	・	・	・	・	・	13
塙保己一学園	・	・	・	・	・	・	17

埼玉県立皆野高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 商業・情報処理科 生徒数: 102人
 教育課程の特徴: 一人一人の適性に合った授業選択
 : 少人数の学級、少人数の授業展開
 : 時代の変化に対応した学び

進路: 就職希望者の内定率3年連続100%

皆野高校の特色!

- ①きめ細かい指導で生徒一人ひとりの得意分野を伸ばす
- ②地域と連携した多彩な教育活動を展開
- ③緑豊かな静かで落ち着いた環境の学び舎

アクセス

秩父鉄道「皆野駅」から町営バスで約10分 ※「長生荘」下車

埼玉県立浦和東高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科 生徒数: 956人
 教育課程の特徴: 1(ワン)・2(ツ)・5(ファイブ)のカリキュラム
 : 新学習指導要領と大学入試改革に積極的に対応

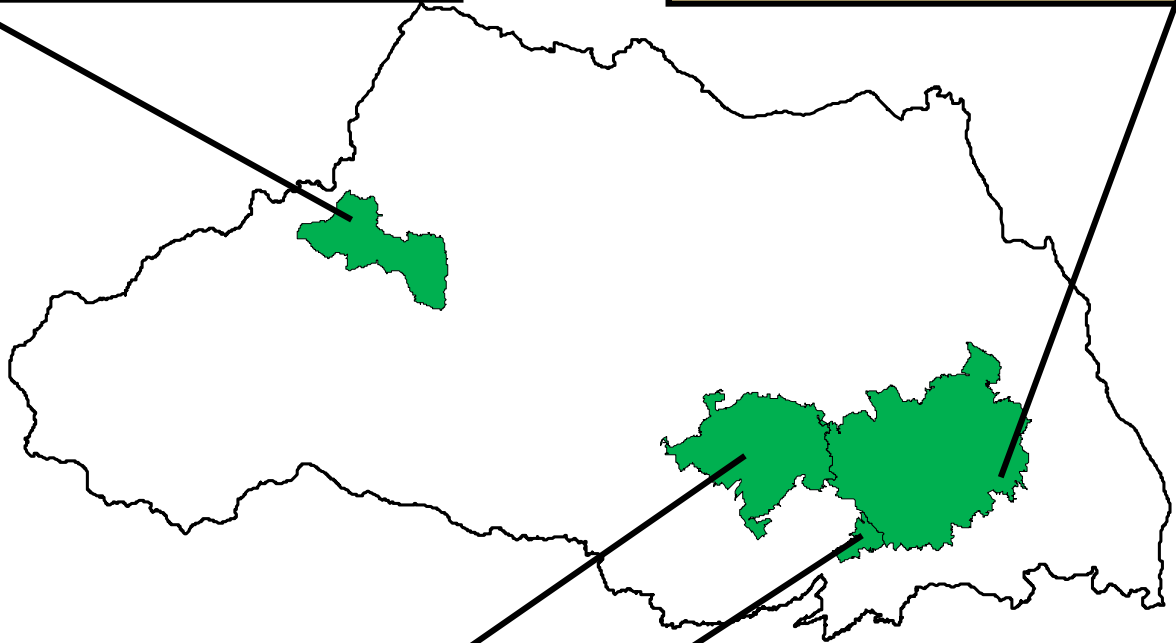
進路: 大学・短大・専門学校への進学が中心

浦和東高校の3年後の目標

- ①主体的に探究する姿勢を身に付ける
- ②自己肯定感を高め、自己実現を図る
- ③自律心を以って人格の完成を目指す

アクセス

さいたま高速鉄道 浦和美園駅 バス・徒歩16分 他



埼玉県立特別支援学校塙保己一学園



学校基本情報

種別: 視覚障害 学部: 幼・小・中・高・専 生徒数: 127人
 教育課程の特徴: 点字や拡大文字などを使い幼・小・中・高に準ずる教育を実施
 : 発達段階に応じた教育を実施

塙保己一学園の特色!

- ①視覚障害のある(あるいは他の障害もある)幼児から成人まで学ぶことができる学校
- ②困難を改善・軽減する知識技能を学ぶ自立活動を実施

アクセス

JR川越線 笠幡駅 徒歩20分

埼玉県立志木高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科 生徒数: 823人
 教育課程の特徴: 「志木高スピリット」の下、志を育む
 : 数学、英語で習熟度別少人数授業
 : セルフ・マネジメント力の育成

進路: 大学・短大・専門学校への進学が中心

志木高校の重点目標

- ①主体的な学びを推進し学力を向上させる
- ②夢の実現のためセルフマネジメント力を身に付ける
- ③学校生活に誇りと自信を持たせる

アクセス

東武東上線 志木駅 バス13分

県立浦和東高等学校

テーマ サッカーを通じた地域貢献・指導者養成

1 教育効果・目的等

本校サッカー部は250名の部員が3カテゴリー(トップ、サテライト、ユース)で活動している。実際に高体連の大会には最大30名程度の登録選手、日本協会の年間で行うリーグ戦には2チームしか参加できない現状もある。多くの生徒が浦和東高校サッカー部員として活躍できる場を作ることを目的に、Jリーグや日本代表戦等の役員活動、浦和特別支援学校でのサッカー交流(生徒と一緒にサッカーをする)などの部のプレーヤー以外のサッカー文化にかかわる活動や、スタディーグループを設けて一般受験で難関大学の合格を目指す活動を行っていた。そして、3年前に新UEサッカー部の取り組みとして、8つの委員会(学校生活、環境、広報、メディア、フィジカル、TSG、審判、サッカースクール)に分け、一人でも多くの生徒が主体的に動ける環境づくりを行ってきた。

サッカースクールの委員会では、部員の希望者で約10年前より埼玉スタジアムサッカースクールボランティアとして、埼玉スタジアムとの連携を行っていた。さらに3年前より本校サッカー部OB保護者の要請を受け、美園コミュニティセンターのサッカー交流会を始めることとなった。最初の年は、顧問がメインコーチ、部員がアシスタントコーチとして活動を行ってきたが、その年の振り返りの際に、埼玉スタジアムサッカースクールでアシスタントコーチとして1年間学んできたことを美園交流会で生かせないかと考え、2年目より生徒主体の交流会運営を行ってきた。

4年目を迎える本年度、地域との協働で連携を広げ、その中で生徒が主体的になるような活動がしたいと考え、「学校地域WIN-WINプロジェクト」への参加を決定した。その際に、本番の交流会を生徒主体にするだけでなく、その準備としてJFA公認キッズリーダーの資格も取得させるなど、指導者としての知識・技能を勉強する場も設けた。

2 実践内容

(1) 埼玉スタジアムサッカースクールボランティア

ア 主な業務

- ①スクールの備品の準備 ②スクール生への見本
- ③元気な声でスクール生に声をかける

イ スクール現場で得られる経験値

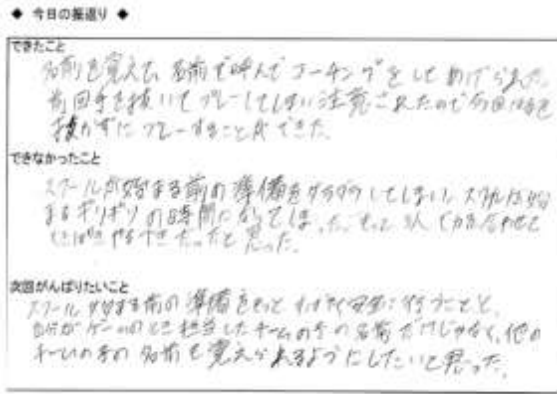
- ①サッカーができる喜びを客観的に感じることができる
- ②サッカーの基本プレーが確認できる
- ③人に物事を伝える難しさ、大切さ、素晴らしさを体験できる



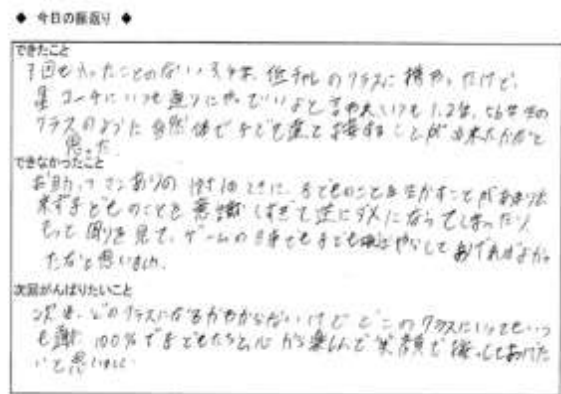
【スクール 練習前の様子】

ウ 日々の活動の振り返りシート

生徒は1日の活動終了後、振り返りシートを記入する。書き終わった後に、担当の方と話しながら、客観的な視点を踏まえ、次の活動へ活かす材料を作る。はじめは振り返りを自分の言葉で書けなかった生徒も6か月たつと具体的な振り返りができるようになった。



[振り返り 2月]



[振り返り 8月]

(2) JFA 公認キッズリーダー講習会

7月10日(水)に、JFA 公認キッズリーダー養成インストラクターの浅見さんをお招きし、キッズリーダー講習会を行った。座学での講義を2時間、実技の2時間の中から、U-10年代の子どもたちに対する指導について学んだ。



[キッズリーダー講習会 練習前のミーティング]

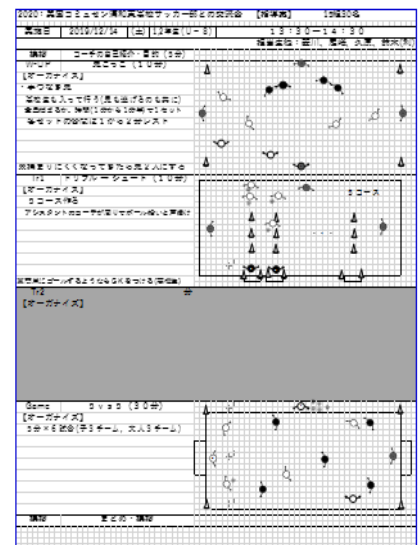
(3) 美園コミュニティセンターでの交流会

12月14日(土)に美園コミュニティセンターにて「浦和東高校サッカー部との交流会」を行った。

ア 11月初旬にメンバーを決定し、スクールでの経験からU-8(1,2年生)とU-10(3,4年生)の指導案を書き、それをもとに議論をしながら、交流会の準備を行った。

イ 交流会当日

交流会当日はU-8の会は13組26名、U-10の会は8組16名の参加者があった。生徒は、当日の親子が子どもだけの参加である家庭もあったこと等、事前に想定していなかったことも起きたが、生徒は全員で協力しながら進行できた。



[指導案 U-10]



[当日の様子①]



[当日の様子②]

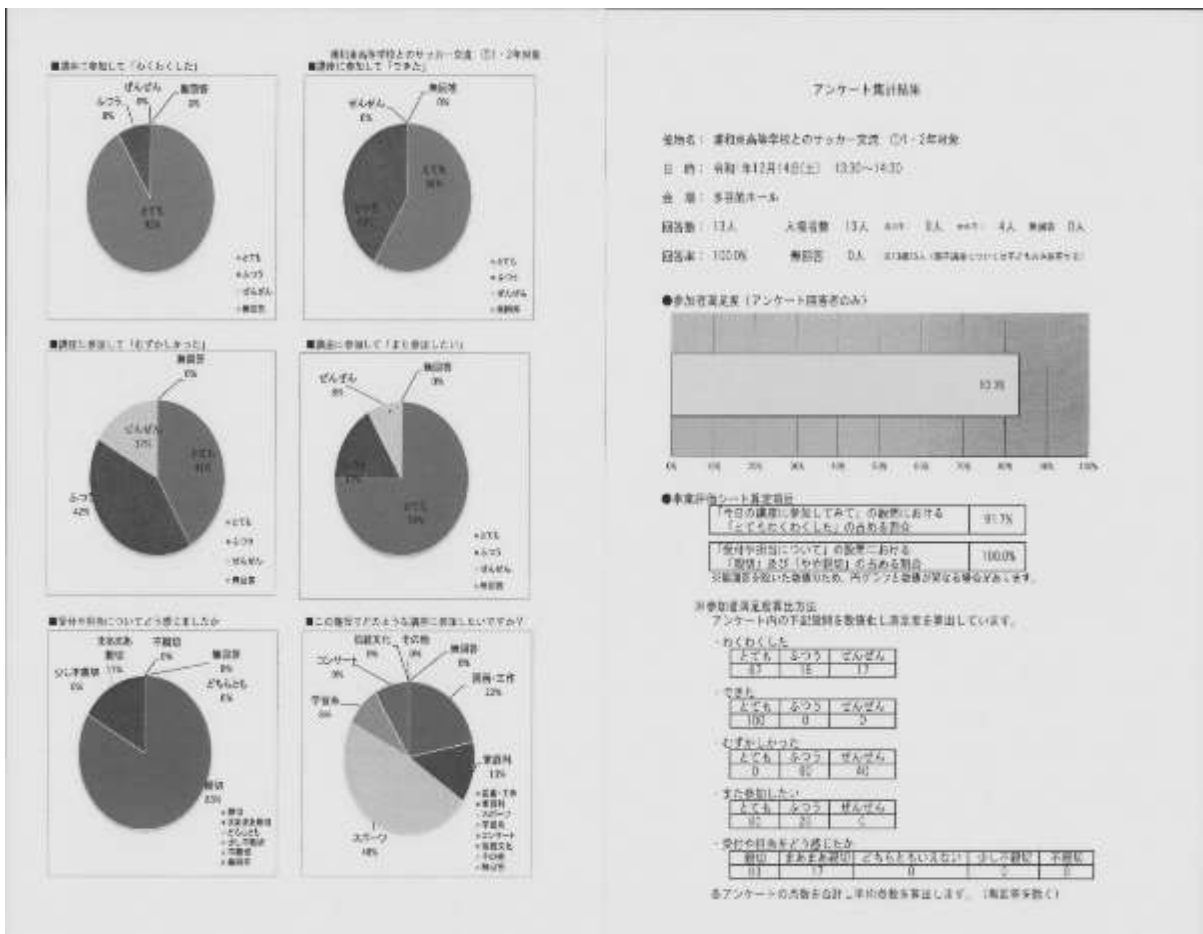
3 実践の成果

(1) 生徒の感想

・「昨年度も参加しましたが、昨年度は埼玉スタジアムサッカー学校も経験していなかったため、先輩方のやっていることについていだけで精一杯でした。子どもたちに対してもどう声掛けした
いいか、どう接したらいいのか全く分からないまま、あっという間に終わってしまいました。
しかし、今年度スクール活動や、キッズリーダー講習会を受けたことで、うまくコミュニケーションを取りながら練習を進めることができました。自分たちで練習メニューを作り、それを進めていくことの充実感、達成感を得られました。将来、サッカーの指導に関わりたく
と考えているのでこの経験を財産に今後の部活動も前向きに頑張っていきたいです。」

・「僕は中学時代まで埼玉スタジアムサッカー学校のスクール生でした。中学時代、浦和東高校の先輩方が学校のアシスタントコーチとして優しく接して下さったことがきっかけで浦和東高校サッカー部に入りました。現在、僕も学校のアシスタントコーチとして子どもたちに関われることで、子どもたちにも同じように経験をしてもらえたらと思っています。今回の交流会もそんな思いで活動しました。自分たちで練習を考え、当日の流れを進めていくことは大変でしたが、貴重な体験ができました。また来年度もスクール活動も含め関わっていきたいと思います。」

(2) 美園コミュニティセンターからの交流会アンケート集計結果 (U-8)



(3) 参加者の声 (小学生)

「試合に勝って面白かったです。」 「サッカーを教えてくれてありがとうございました。」

(4) 埼玉スタスクール 1年間の活動を通して（スクールのコーチより）

「コーチとして初めて子ども達の前に立った瞬間から約1年スクールのコーチ、子ども達、保護者との関わりの中で、たくさんの視点を身につけてくれました。子ども達が高校生コーチと接しているときの表情を観ていると、信頼関係が構築されていることがよくわかります。それは、スクールでの立ち位置や役割を理解しながら、子ども達へとまっすぐ向き合った結果です。スクールコーチから厳しい要求をされる日もあったと思いますが、腐らず、一番大切なことである『サッカーを楽しむこと』を忘れずにいてくれました。スクールとしては感謝しかありません。今後、どのようなステージに進んでも活躍してくれると信じております。」

4 課題と今後の展望

(1) 課題を把握するために

- ・毎年コミュニティセンターが実施し、統計していただいているアンケートや埼玉スタスクールスタッフとの打ち合わせ、普段の生徒とのコミュニケーションをもとに振り返りを行う。

(2) 解決する課題の設定

- ・この交流会のあり方を学校、コミュニティセンターや受講していただいた親子のニーズなど複数の視点から考える。※アンケートの内容から全体として満足してもらえた一方で課題として①難易度を上げること ②子どもたちにとって興味・関心を持たせ、好奇心をくすぐるような内容を行うことを来年度以降考えていく。

- ・毎年編成されるメンバーが違う中、年間での課題が同じものにならないよう、引き継ぎの際に注意する。新年度のメンバーは、上級生との研修期間を延ばし（2週間から1か月へ）、さらにスクール班全体での上級生からの引継ぎを行うようにすることになった。

(3) 地域との連携

- ・この取り組みは、地域の市報(緑区)にも取り上げていただいているものである。来年度以降、参加者を増やす手段として、生徒が交流会に向けて、コミュニティセンター側と積極的に連携をとって宣伝を行ったりすることもあれば地域の方々もより協力してくれるのではないかと考える。

(4) 活動その後

- ・埼玉スタスクールコーチ、キッズリーダー講習会、美園交流会等、現在スクール班が行っている活動はどうしても環境が提供された上での活動となっている。新チーム発足と同時に新しいスクール班が結成され、活動を行うので、余裕がない現状があり、だんだんと慣れてきたタイミング（5、6か月程度かかる）で活動が終了してしまう。次年度に少しでも多くの経験者が残り、継続性を持つことで、より生徒が主体的にできる班としたい。

- ・まだまだ、スクールコーチをすることが部員にとっては価値のあることになっていない現状もある。

- ・多くの生徒が憧れを持つような活動にできるよう、学校内、地域に向けて情報発信を行ったり、埼玉スタジアムのスクールの関係者と連携をとったりすることで、生徒主体の活動ができるような体制を整えていきたい。

令和元度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立志木高等学校

テーマ 志木高倶楽部プロジェクト

1 教育効果・目的等

(1) 現状と課題

本校を挟んで小学校、中学校が並び12年間の教育をこの地域で受ける生徒も多い。志木市内唯一の県立学校であることもあり、地域に根差した学校として、地域との交流や貢献活動を積極的におこなっているが、地域の取組みに本校が協力するにとどまっている。

(2) 目的

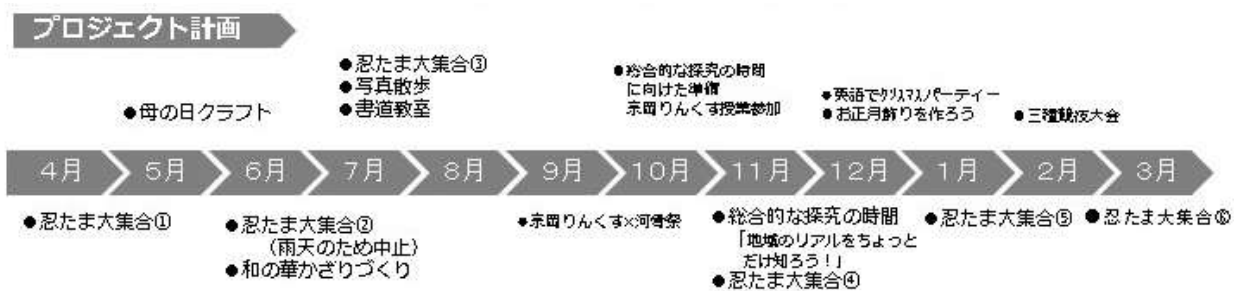
市民団体「宗岡りんくす」や東洋大学等と連携し、子供向けスポーツプログラムやサマースクールを実施し、本校を中心とした地域交流の輪を広げ、地域に開かれた教育課程を実現する。

(3) 期待される教育効果

- ・生徒にとって身近な社会である地域への関心が高まり、参加・参画意欲が高まる。
- ・地域の方と協働でプログラムを企画・運営することにより、実社会から学ぶ経験が自信につながり、生徒の自己有用感が高まる。
- ・地域に開かれた教育課程が実現し、地域の人材を学校教育に活用し、地域から学ぶ機会となる。
- ・プログラムを通して本校の教育力を地域で発揮する。

(4) プロジェクト方針と計画

- ・子供向けスポーツプログラム「忍たま大集合！志木高校で修行だよ」（年6回計画）を軸に毎月1回は地域と協働のプログラムを企画し実施する。
- ・全校生徒を対象として、多くの生徒が関わるプログラムとする。
- ・本校を会場とした地域交流活動を実施する。
- ・プロジェクトの一貫として、地域の方々から学ぶ探究学習を実施する。



【志木高倶楽部プロジェクトの流れ】

2 実践内容

(1) マスコットキャラクターの誕生

プログラムの企画を進める中で、本校のマスコットキャラクターこうちゃんの忍たまバージョンを作ろう！というアイデアが生まれた。本校の美術部の協力により「こうちゃん」が忍者に変身し「忍たま大集合！志木高校で修行だよ」の参加者募集に活用した。



【こうちゃん×忍たま大集合！】

(2) 忍たま大集合！志木高校で修行だよ

【プログラム概要】

運動「苦手」を「好き」に変える子供向けスポーツプログラム（全6回）

【主催】

志木高校 宗岡りんくす 東洋大学 西武ライオンズ
宗中おやし仲間倶楽部

【参加生徒】

陸上部生徒 有志生徒 写真部 美術部 イラストコミック部
ア 全6回のプログラム内容と参加者



【忍たま① 走る修行】

修行回	実施日	修行内容	参加生徒数	地域
忍たま①	4月28日(日)	走る・投げる・跳ぶ	40名	202名
忍たま②	6月8日(土)	雨天中止		
忍たま③	7月27日(土)	サッカー系・ダンス系	33名	143名
忍たま④	11月10日(日)	走る・投げる・跳ぶ	28名	114名
忍たま⑤	1月26日(日)	まわる・なげる	7名	138名
忍たま⑥	3月	未定		

イ 修行の様子



【忍たま① 跳ぶ修行】



【忍たま③ サッカー系修行】



【忍たま③ ダンス系修行】

ウ イラストコミック部による缶バッジのデザイン



企画会議で、参加者に「忍者こうちゃん」のバッジをプレゼントしようというアイデアが生まれ、イラストコミック部がデザインを担当した。全6回のプログラムに参加すると6種類の缶バッジがそろったデザインになっている。

(3) クラフト教室

【プログラム概要】

地域の子供向けクラフト教室で参加した子供を本校生徒がサポート

【主催】宗岡りんくす 【協力】志木高校

【参加生徒】

生徒会呼びかけによる有志生徒

ア 母の日クラフト

5月11日(日) 参加生徒13名 地域21名

イ 和の髪飾りづくり

6月15日(土) 参加生徒11名 地域38名



【母の日クラフトの様子】

(4) サマースクール

【プログラム概要】

本校の生徒が宗岡りんくすとの共催により、夏季書道教室、写真教室を開催

【共催】志木高校 宗岡りんくす

【参加生徒】書道部 写真部

①写真教室（写真散歩）

7月22日（月）参加生徒11名 地域16名

②書道教室

7月25日（木）参加生徒7名 地域43名



【書道教室の様子】

(5) 広がった地域交流の輪

【地域交流の概要】

本校を会場とした地域交流を実施した。

①三種競技大会

本校を会場として、スポーツを通じた地域交流三種競技大会を開催した。

②河骨祭への参加

本校文化祭（河骨祭）に宗岡りんくすがブースを出店し（千本引き、物品販売、缶バッジ作成）本校生徒や来校者と交流した。



【河骨祭で千本引きに挑戦する生徒】

(6) 総合的な探究の時間

「地域の方から身近な地域社会の課題を探究する授業」を実施したいと宗岡りんくすに相談し、まずは「総合的な探究の時間」に参加してもらい、授業案を練った。地域で活躍されている方とテーマをコーディネートしていただき「地域のリアルをちょっとだけ知ろう」をテーマに1年生の「総合的な探究の時間」の授業をおこなった。

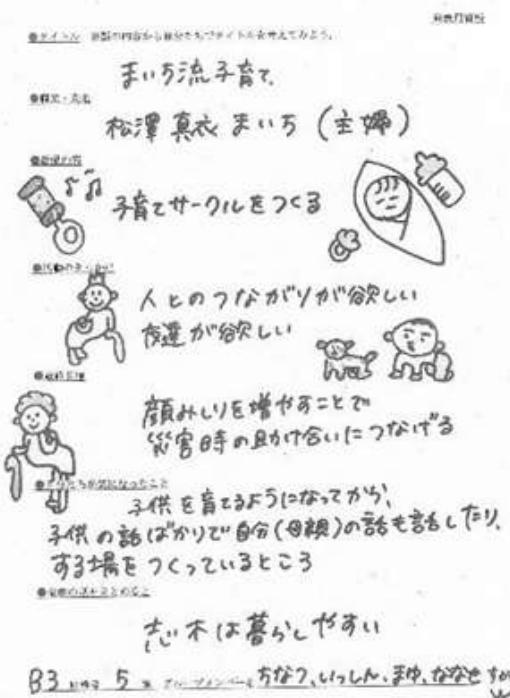
【各講師からお話いただいたテーマの例】

- ・ボランティア活動
- ・シニアの健康増進
- ・地元でフリーランス
- ・特別支援学級の実際
- ・NPOネットワークづくり
- ・子育てサークルの運営
- ・民生委員・児童委員の活動
- ・不登校児童・生徒支援
- ・マンションのコミュニティ活動
- ・外国籍の人との共生
- ・志木市議会議員として
- ・災害時の活動
- ・高齢者の居場所づくり
- ・学童・子ども教室
- ・包括支援・多世代共生
- ・子ども会の活動
- ・障がい者の就労支援

【まとめ：テーマの例】



【地域で活躍・活動する講師20名】



【グループでまとめたワークシート】

(7) 英語でクリスマスパーティー

【プログラム概要】

本校の英語科と語学研修に参加した生徒が中心となり企画運営し、地域の子供向け英語プログラムを実施した。

【主催】志木高校 【協力】宗岡りんくす

【参加生徒】 語学研修に参加した生徒中心

12月15日(日)開催

参加生徒10名 地域50名

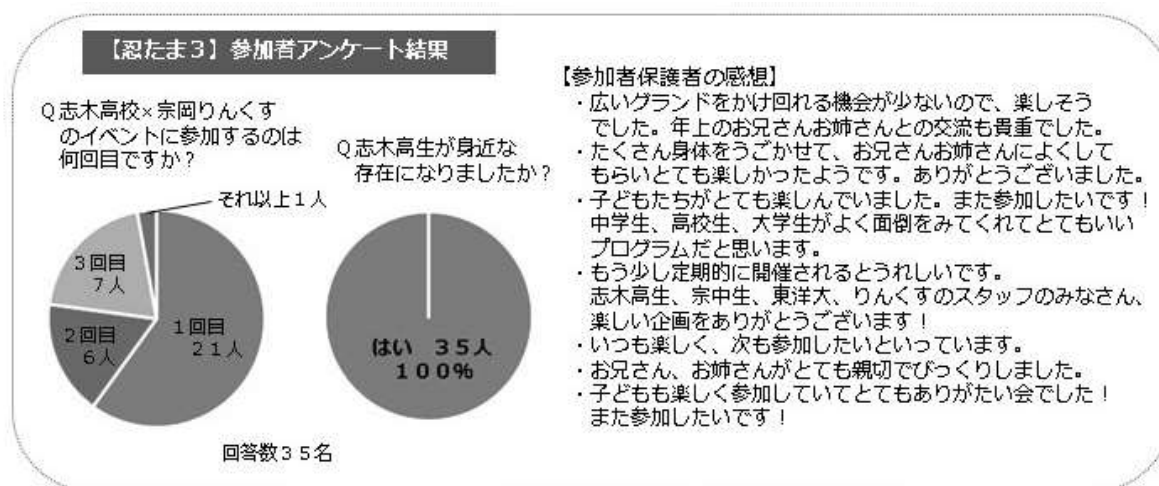


【クリスマスクッキー作りの様子】

3 実践の成果

(1) 参加者アンケートから

アンケート結果にもあるように、イベントの回数を重ねるごとに、本校を身近に感じていただけるようになり、参加者も増加した。校内では、プロジェクトの取組みが広がり、当初の期待通り、生徒や職員の積極的な参加・参画が増加した。



【忍たま3参加者アンケートの結果】

(2) 実践後の生徒の変化

プロジェクトに参加した生徒からは「普段ふれあう機会のない人と関わって、いい経験になった」「最初はあまり上手に関われなかったが、慣れてくると子供たちから刺激を受けて勉強になった」「自分にもできることがあると思った」「こうした学校と地域のつながりを大切にしたい」といった感想が寄せられるなど、今回のプロジェクトが生徒にとって良い経験となり自身につながっている。

4 課題と今後の展望

(1) プロジェクトの継続と発展

1年間のプログラムを通して、地域と協働で取組む流れができ、地域に開かれた教育課程の足がかりが完成した。今後は、「生徒が地域で成長するプロジェクト」として、今年度の取組みを継続し、発展させることが課題である。

(2) 魅力ある学校づくり

今回のプロジェクトを通して、地域住民にとって本校が身近なものとなった。この繋がりを大切に、地域に根差した魅力ある学校づくりを進める。

令和元年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立皆野高等学校

テーマ 「商業の力で課題解決！」

1 教育効果・目的等

本校は、秩父郡皆野町にある創立54年目を迎えた秩父地域唯一の商業高校である。全校生徒100名ほどの非常に小規模な学校ながら地域とのつながりが強く、小学校へのボランティアや、街の清掃活動、インターンシップ等、幅広く連携を行ってきた。

本校では、現在2年次選択授業「マーケティング」において商品開発に取り組んでいる。平成29年度「激推 イノシカバーガー」(ジビエを使ったハンバーガー)を、平成30年度には「タコアロス」(ジビエを使ったタコライス)を開発して、秩父地域で捕獲された野生鳥獣の利活用を推進しながら、販売から得た利益を地域に還元する活動を行ってきた。しかし、これまでに本校が開発した商品の製造は、秩父市内で行われており、地元「皆野町」の名物としては認知されていないという課題があった。そこで、皆野町役場みらい創造課より「皆野町の名物」となる道の駅みなの新メニュー開発の依頼を受け、本プロジェクトが始動した。

本プロジェクトの発足にあたり、校内でプロジェクトメンバーを募った結果、3年生8名の生徒が本プロジェクトに参加することとなった。

そこで実践にあたり、プロジェクトを成功させることを目標に、世代を超えた人々との意見交換などを通じて、生徒の課題発見能力や課題解決能力を養うことを目指し取り組んだ。

2 実践内容

本プロジェクトでは、皆野町役場・JAちちぶと連携し、道の駅みなの内レストハウスの新メニューの開発に取り組んだ。

(1) 実践時期(令和元年)

- 5月 プロジェクトチーム発足
- 6月 第1回関係者会議
具材アイデア出し・提案資料の作成
- 第2回関係者会議
- 7月 第3回関係者会議(試作品試食会)
商品名・PR方法提案資料
- 8月 リーフレットの作成
第4回関係者会議
- 9月 販売延期の決定
- 11月 第5回関係者会議



実践のイメージ図

(2) 実践内容

ア 第1回関係者会議

6月3日(月)皆野町役場において、本校生徒2名と職員2名・皆野町役場みらい創造課・JAちちぶによる会議を行った。まず、メニュー開発にあたり、ジビエを活用した新メニューを開発することが決定した。また、新メニューの販売を行う道の駅みなのレストハウスへの負担も考慮し、現在の看板メニューである「田舎うどん」をアレンジしたジビエ肉うどん開発を進めることとなった。日程についても打ち合わせを行い、令

和元年10月6日（日）に開催予定の「道の駅みなの7周年イベント」において、販売を開始することが決定した。そして次回会議では、本校生徒がジビエ肉うどんに合わせる具材案を提案するという課題が出された。

イ アレンジアイデア出し・提案資料の作成

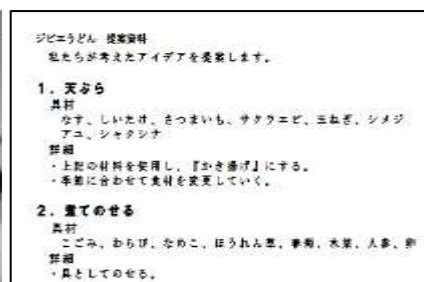
第2回関係者会議に向け、プロジェクトメンバーでうどんに合わせる具材についてアイデア出しを行った。秩父地域ならではの「しゃくしな」や「山菜」をはじめとする様々なアイデアを出しあった。付箋・模造紙を使用してまとめ、ワープロソフトを利用して提案資料の作成を行った。



アイデア出し



資料の作成



作成した資料(一部)

ウ 第2回関係者会議

6月24日（月）道の駅みなのにおいて、本校生徒6名と職員3名、皆野町役場みらい創造課、JAちちぶ、道の駅みなのレストハウスが参加し会議を行った。作成した資料をもとに具材の提案を行い、食材の価格・入手のしやすさ・調理の手間など様々な視点からアイデアが絞り込まれた。その結果、道の駅みなので販売されている地元野菜を使い、季節に合わせた「かき揚げ」を付け合わせ具材として決定した。

また、道の駅みなのを利用する客層についての情報を共有し、次回関係者会議までに販売商品のターゲットやPR方法について本校生徒が考え、提案するという課題が出された。

エ 第3回関係者会議（試作品試食会）

7月17日（水）道の駅みなのにおいて、本校生徒6名と職員3名、皆野町役場みらい創造課、JAちちぶ、道の駅みなのレストハウスが参加し、試作品試食会を行った。イノシシ肉、シカ肉を使った肉うどんの試食を行い、それぞれの肉の特徴を共有しながら改善案を話し合った。また、イノシシ肉¥5,000/kg、シカ肉¥2,500/kgと肉自体も高いため、具材としてかき揚げを使用するとかなり高額なメニューとなるという課題が生じた。

オ 商品名・PR方法提案資料・リーフレットの作成

第4回関係者会議に向け、プロジェクトメンバーで商品名・PR方法・リーフレットについてアイデアを出し、提案資料の作成を行った。道の駅みなのを主に利用している、県外からの高齢者観光客をターゲットに設定し、新聞社への取材依頼や、秩父地域内の観光スポットへのポスター掲示依頼等の提案を行った。

また、秩父おもてなし観光公社が配信しているYouTube番組「秩父おもてなしTV」への取材依頼や、皆野高校が更新を依頼されている、皆野町公式インスタグラムを活用するなどして若い世代へのPR活動を具体的に考案した。



生徒が作成したリーフレット

カ 第4回関係者会議

8月26日(月)道の駅みなのにおいて、本校生徒6名と職員3名、皆野町役場みらい創造課、JAちちぶ、道の駅みなのレストハウスが参加し、第4回関係者会議を行った。商品の価格という課題に関しては、かき揚げは付けず、肉の量を調整することで価格を下げることに決定した。本校生徒から商品PRに関する提案を行い、加えて皆野町報や皆野町観光協会ホームページ、埼玉県県政ニュース等への掲載依頼を行うことが決定した。PR方法の決定を受け、当日は通常メニューから、ジビエうどんのみの販売に切り替え、販売数を増やすという案も出された。さらに、作成したリーフレットに対するフィードバックをいただき、裏面の説明文の工夫などアドバイスをいただくことができた。次回会議において、実際の販売商品の試食が決定した。



第4回関係者会議の様子

(3) 販売の中止

9月中旬、秩父地域において豚コレラが確認され、その感染経路として野生のイノシシも考えられたことにより、ジビエメニュー販売について対応の検討を余儀なくされた。

まず、販売延期が決定され、販売実施の可否については、後日会議を開くこととなった。

11月19日(火)に皆野町役場において、本校生徒7名と職員1名・皆野町役場みらい創造課・JAちちぶが参加し



第5回関係者会議の様子

今後の対応を決定する第5回関係者会議を行った。秩父地域の対応や、現状などの説明をJAちちぶから受け、対応について検討を行った。農林水産省が感染した個体を食べても人体に影響がないことを発表していたが、秩父地域内においても全頭処分を余儀なくされた養豚農家があり、その心情や現在の状況を踏まえると、商品化ができないという結論に至った。

3 実践の成果

(1) プロジェクトに対する生徒の感想

・私は、この経験の中で色々なことを学びました。メンバーで出し合ったアイデアなどをまとめて、JAや皆野町役場と話し合ったり、試食したり、商品が開発される流れを体験することができました。販売ができなくなってしまったことについて非常に悲しいし残念です。この経験がなければジビエに触れることなんてなかったと思うし、豚コレラがこれほど怖い病気だと考えることもなかった。この活動で培ってきた色々な経験や、人間関係などを、今後自分の中で磨き上げて将来に活かしていきたいと思います。

・ただ売ればよいと言うわけではなく、周りの人のことを考えて行動しなければならないということを学んだ。

・自分の意見を言うことができた。地域で起こっている鳥獣被害について知ることができた。中止になってしまい、被害を減らす手伝いが出来なくなり残念だった。

・色々なことを考えるには知識が必要なことが分かった。また、案を出すときには話す必要があるのでコミュニケーション能力がついたと思う。

(2) 担当教員の感想

・本プロジェクトを通じ、様々な方と交流をすることができ地域とのつながりが強まったように感じている。また、活動の中で生徒たちが、考えたアイデアを自分たちなりに連携

先に伝えるという経験だけでなく、それに対しフィードバックをもらい、さらに改善をしていく経験をしたことで、生徒自らが課題を発見する能力や解決能力が醸成されたと感じている。

・地域の特産について勉強することができ、教員としても非常に興味深かった。また、会議を重ねるごとに、様々な意見を聞くことができ、視野が広がり、とても勉強になった。生徒も課題に取り組む中で、自ら課題を発見し改善方法を考えるために様々な人の意見に耳を傾け、アイデアに取り組む過程で大きく成長することができたと感じている。

(3) 成果

本プロジェクトを通じ、生徒に様々な経験をさせることができた。それまで知ることのなかった地域課題や、地域の特産・名産品等を知り、地域を知るきっかけとなったとともに、自らが住む地域の住民意識が醸成されている。

また、アイデアを考えるだけでなく、関係者会議において提案する経験を通じて、伝える力や、要望やアドバイスを聞き入れる力などのコミュニケーション能力を育成することができている。さらに、資料やリーフレットを作成する際に、まとめ方や、情報の整理の工夫を行ったりと、課題発見能力や、解決能力が醸成された。不測の事態によりプロジェクトが中止となってしまったが、その対応を話し合う中で、養豚農家の現状等を伺い、アクシデントや災害などの予測不能な外的要因により思い通りにいかないことがあることを痛感した。

さらに本プロジェクトを通じ、今まで以上に皆野町との連携が強まり、今後さらなる連携を行っていく土壌を作ることができたと自負している。

4 課題と今後の展望

(1) 課題

今回、残念ながら販売中止になってしまったことを踏まえ、地域のジビエ肉だけではなく、様々な地域を代表する食材や素材を活用した商品の開発を視野に入れていく必要がある。今年度の取組については、有志生徒の参加・3年生のみで活動を行った。そのため、生徒自身にとっては1年間で取組が終了してしまい、地域とのつながりができかけたところでの終了となってしまった。学校として、継続して地域との連携を行うとともに、生徒にとっても継続的な取組となるよう工夫が必要であった。

また、プロジェクトの大きな目的である商品の販売を実施することができなかった。様々な要因からプロジェクトが中止になることも踏まえ、サブプロジェクト的な、小さな成功体験ができるような取り組みを並行して行う必要があったと感じている。

(2) 今後の展望

今後も、地域と継続した取組を行っていきたいと考えている。以前から本校が行ってきた地域連携や、本プロジェクトを通じて行った地域連携を、さらに強めていき、地域の学校として教育活動を行っていきたい。また、単年度的な取組ではなく、各学年において、可能な範囲で探究的な学びが行えるよう工夫することで、実践のブラッシュアップや、生徒自身が自らの経験を活かすことで、より効果的な実践を行うことのみならず、生徒の成長を促すことができるのではないかと考えている。

そして、学年の段階に応じてプロジェクトの大きさや難易度を調整し、生徒に探究的な学びの機会を提供することで、達成感や、自己有用感、課題発見解決能力を醸成していきたい。高校3年間の系統的な指導を通じて、学校と地域が連携して地域で活躍する人材を育成し、長期的な視点においても地域にとって利益となる教育活動を行っていきたい。

県立特別支援学校埴保己一学園（県立盲学校）

テーマ 理療教育の理解啓発と東洋療法研修センターの推進

～県民・市民との校外応用実習・ふれあいマッサージを通じて～

1 教育効果・目的等

(1) 教育効果・目的

本校は、県内唯一の視覚障害の特別支援学校である。開校、明治41（1908）年、創立112年目を迎えた幼児児童生徒数127名の学校である。本校は、平成21（2009）年に現在の校名に改名された。まだまだ知名度の低い学校でもある。今回、高等部専攻科（職業教育課程）における、教育課程・校外応用実習を通じた、県民・市民とのふれあいマッサージ（WIN-WIN）の教育実践を紹介する。校外応用実習の目的は、多くの職域と連携し、実践していく実習は、生徒一人一人の進路・卒業後の進路を検討する際に重要なものである。その実習目的は、①あん摩マッサージ指圧師としての態度・マナーを身につける。②コミュニケーション能力を養う。③個人に応じた力加減で、マッサージを行う技術を身につける。等が求められている。

また、専攻科の教育目標は、以下の4項目を掲げている。①自己の障害を認識し、障害を補う力を身につけると共に、持てる能力を発揮し、自己実現に向けて努力する。②医療・介護等の担い手として、健康管理に努めると共に、豊かな人間性、社会性を養う。③視覚障害のあるあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師に必要な知識・技能を習得すると共に、職業自立を図る。④「東洋療法研修センター」を拠点に、臨床力向上に向けた生涯研修及び理療の普及・啓発等に取り組む。

(2) 展開方法・具体的な活動

校外応用実習・郊外臨床実習を通じた県民・市民とのふれあいマッサージ実習を行った。校外応用実習は、カリキュラムの中でも就労を念頭においた実技の実践授業である。生徒同士の実技授業として学習した後、「校外応用実習」を行っている。入学してから初めてとなる患者・利用者様への施術の実践授業です。

実習先では、表1のような「実習評価シート」を作成し、患者・利用者様に施術直後に記載していただき、施術者である生徒に対する評価方法として活用している。評価表はその場で生徒に聞かせ、フィードバックし、必要に応じて、その都度の施術に活かし、実習指導の効果を高め、教育的意義ある「評価シート」となっている。

(3) 効果を高めるための事前・事後学習の内容

事前学習・指導としては、第2学年の4月から7月は、医療面接（患者との挨拶、接遇等）、コミュニケーション概論、手技応用実技（あん摩・マッサージ）等の授業を通じて校外応用実習の準備期間である。

事後学習・指導としては、「実習評価シート」を作成し、患者・利用者様に施術直後に記載して頂き、生徒の自己肯定感や向上心（探求心）に対する評価方法として活用している。

2 実践内容

実習先としては、地域との連携協力（WIN-WIN）を図り、県民・市民に対して専攻科を知っていただく啓発活動の場ともなっている。実習先としては、

- かすみ野自治会における地域住民に対するマッサージ実習
- 企業（BML）の社員に対するマッサージ実習
- 医療機関（西部診療所）の患者、利用者様に対するマッサージ実習
- 大学（東京国際大学）の教職員に対するマッサージ実習

また、就労支援課と協力し、ワークフェア in 浦和においてマッサージ体験の運営を実施している。その他、霞ヶ関公民館における敬老マッサージ実習、県庁オープンデー、特別支援学校職業教育フェアに参加し、マッサージ体験の運営を通じて、「県民・市民とふれ

あいマッサージ」(WIN-WIN)を実施している。実習先では、生徒は現場を体験するという、より実践的実習であり、介護保険業務における機能訓練指導員、企業における社員の疲労回復やリフレッシュ(ヘルスキーパー)を目的に施術を行っている。多くの職域と連携し、実践している、この実習は、生徒一人一人の進路・卒業後の進路を検討する際に重要なものとなっている。



接客・マナーの指導



BML(企業)校外応用実習



県庁ふれあいマッサージ



敬老マッサージ実習



職業フェア in 浦和コロソ



県庁マッサージで活躍する
つえぼんとコバトン

3 実践の成果

(1) 指導の評価

実習先では、「実習評価シート」を作成し、患者・利用者様に施術直後に記載していただき、施術者である生徒に対する評価方法・指導の成果として活用している。評価表は、生徒個々のマナー・態度、技術等の向上・成長、探求心を養うものであり、他者からの評価を受ける場となっている。実習指導の効果・成果を高め、教育的意義ある「課題解決授業」の一つとなっている。

(2) 実際に施術させていただいた患者・利用者様からの主な「感想・アドバイス」

ア 良かった点(患者・利用者)

- ・全くはじめてだったのでとても気持ち良かったです。
- ・感激！県内いたるところで実施されると良いと思います。
- ・学園について知らなかったがよく理解できた。近くに開業していただければ行きたい。
- ・朝から頭痛があったが、肩のほかに頭のマッサージもしてもらい目の痛みがとれた。
- ・マッサージのレベルが分かり、今後機会があれば受けてみようという端緒になった。
- ・鍼について教えてもらったので今後行ってみたい。

イ いたらなかった点(患者・利用者)

- ・言葉が少なかった。
- ・肩は少し力が弱かった。
- ・もっとアドバイスのことを頂けると良い。

*重複する内容については載せていません。

(3) 「生徒の感想・意見」

- ・実習を通じて、コミュニケーションが大事なことを痛感し、実践経験ができた。
- ・お年寄りに対する声掛けの仕方やコミュニケーションの実践を経験できた。
- ・幅広い年齢層と接すること、異性に対する施術経験がなかったので勉強になった。
- ・技術の向上を実感できた。
- ・実習で得た症例を後日授業でフィードバックしてもらえて、今後に活かされる。
- ・様々な症例をクラスメイトで共有できたことは意義ある実習である。
- ・評価シートについては、適切な項目だと思う。自分の施術技術がよくわかる。

4 課題と今後の展望

(1) 「実習評価シート」について

校外応用実習の教育的意義を高めるためにも「実習評価シート」の更なる改善が求められる。また、患者・利用者様に対する接客やマナーの指導法も課題の一つと考えられる。そのためにも、実習前指導、実習前試験の導入も検討課題である。

(表1) 実習評価シート

実施施設： _____ 実施日時： _____ 月 _____ 日

【実習の目的】

- ・あん摩マッサージ指圧師としての態度・マナーを身につける。
- ・コミュニケーション能力を養う。
- ・個人に応じた力加減で、マッサージを行う技術を身につける。

上記、実習目的に沿って、以下の質問についてお答えください。(○はそれぞれに1つ)

	満足	どちらか といえば 満足	どちらとも いえない	どちらか といえば不満足	不満
あいさつ、言葉づかい(明るく、はっきり等)	5	4	3	2	1
揉んでほしいところに、手がうまく当たっていた	5	4	3	2	1
力加減	5	4	3	2	1
総合満足度	5	4	3	2	1

性別 男 女 施術部位 首・肩 腰・脚 その他

年齢 20代～30代 40代～50代 60代 70代 80代以上

・今回の取り組みに対し、ご感想やアドバイス等ございましたらお書きください。

良かった点	
いたらなかった点	

ご協力ありがとうございました。

(2) 校外応用実習を通じて、以下の3つの障壁が改めて確認された。

ア 歩行、移動に関する障壁

学校においては単眼鏡の使用法、白杖を用いた歩行訓練等の指導が行われている。

イ 情報に関する障壁 (視覚から入る情報は90%と言われる。)

点字指導、音声・パソコン指導等による情報不足を補う補完授業を行っている。

ウ コミュニケーション力の不足

新科目として「コミュニケーション概論」を創設し、医療面接等の指導を行っている。

また、相手の目を見て話す聞くこと等、その場に応じた会話ができるよう指導を重ねている。

(3) 進路・卒後教育の重要性「東洋療法研修センター」の推進・設置・運営

— 3つの障壁の改善を模索して—

ア 設置・運営の開始

平成30年度は2名、令和元年度は1名の研修生を受け入れた。

イ 設置の目的

高等部専攻科を修了した者の理療教育・臨床教育を推進する拠点としての研修等の事業を行う。

また、「視覚障がいのあるあはき業従事者」の臨床能力の向上と、理療の普及啓発のために必要な事業を行う。

ウ 運営方針

東洋療法研修センターの設置目的に基づき、その機能を発揮するために、理療教育の充実及び理療従事者の臨床能力の向上に役立つように、計画的、総合的に事業（機能）を推進する。

エ 東洋療法研修センターの主な機能

(ア) 専攻科修了生の研修の場としての機能

理療従事者の資質向上を図るための研修講座の開催や、修了生の相談・支援及び情報提供の事業を行う。

○あはき関係研修会の開催

○「専攻科臨床研修生」の受け入れ等

これまでも実践してきた卒後支援を発展させ、就職・開業に向けた研修、転職支援、再教育等、個別のニーズに対応した臨床研修を行う。

(イ) 現職教職員の研修の場としての機能

理療技術の進歩に応じた理療教育を実践するため、臨床研修、進路に関する調査・研究及びこれらを通しての理療科教員の研修を行う。

(ウ) 県民・市民への情報発信・啓発の場としての機能

地域住民に対してマッサージ体験、健康講座等の企画、運営を行い、理療に関する理解・啓発を図る。

○県医療整備課「新任医務担当者研修会」への協力

○地域住民に対する「敬老実習」等の取り組み

○県民・市民への東洋医学健康講座の開催

オ 専攻科修了生の就労先

【年度別就職先一覧】

年 度	名 称
2016	ヘルスキーパー：NECソリューションイノベータ(株)、パーソルサック(株)、SAPジャパン(株)、(株)EPビズ、(株)サイバーエージェントウィル
2017	ヘルスキーパー：(株)サイバーエージェントウィル、(株)EPビズ デイサービス：羽沢の里、デイサービスセンターきらら、介護のさくら 特別養護老人ホーム：みどりの丘 治療院：訪問マッサージ寿楽 開業
2018	ヘルスキーパー：(株)Line 職員：埼玉県立特別支援学校瑞保己一学園 治療院：アッピー治療院